

明恵撰『摧邪輪』巻中 訓・註 試稿（二）

米 澤 実江子

【抄録】

承前（『佛教大学 法然仏教学研究センター紀要』創刊号、二〇一五年）

キーワード…明恵 『摧邪輪』 訓読文 註記

【報告範囲】

「五丁裏四行目より十一丁裏七行目」までを挙げ「試稿」とした。

【凡例】

- 一、底本は、佛教大学図書館蔵「寛永年間版（準貴重書 G 極楽寺／377）」とし、始めに書き下し該当箇所を翻刻し、次に書き下しとその注記（通し番号）を挙げた。
- 一、翻刻にあたっては、底本の字体を残した。書き下しに際して、通行の字体に改めた。

一、翻刻部、【】の内、丁数とオ（ウ）を示す場合は、底本の丁数とその表（裏）を指し、漢数字と上（下）を示す場合は『鎌倉旧仏教』翻刻部の頁とその上（下）を指す。

一、へゝは原割り注。

一、訓読文において、返点・送り仮名は、原則底本に従ったが、送り仮名は適宜補った。

一、訓読文において、典籍引用部は改行して二文字下げた。また引用末の「云々（云云）」は、「く」と云々（云云）。とした。

一、訓読文において、明恵の設問とその答えは、それぞれ改行した。

一、注記における引用出典の略称は以下の通りである。

『昭法全』（『昭和新修法然上人全集』）

『浄全』（『浄土宗全書』）

『大正蔵』（『大正新脩大蔵経』）

『望仏』（『望月佛教大辞典』増訂版）

『中仏』（中村元著『広説佛教語大辞典』）

『織田仏』（織田得能著『織田佛教大辞典』）

『大漢和』（諸橋轍次著『大漢和辞典』）

『日国』（『日本国語大辞典』第二版）

〔付記〕

当研究班研究課題の底本として、佛教大学図書館所蔵本を使用させて頂きました。佛教大学図書館のご厚情に感謝申し上げます。

【五丁ウ 四行ノ／＼三四二頁上】

問曰所レ言經道滅盡時者拍ニ何時ニ乎答諸師異說且依ニ群疑論第三ニ有三家、一、出行禪師義破之ニ云指ニ刀兵劫時ニ彼時人壽十歲身長ニ一肘更不ニ修ニ甚深、戒定慧學ニ唯念佛、生極樂ニ（云云）三引ニ慶友所、法住記ニ云刀兵劫後人壽漸增長ニ至百年十六羅漢以三藏教法流行世間ニ至ニ人壽六萬歲末七萬歲初諸阿羅漢集佛舍利造寶塔供養ニ辭謝語ニ一【六丁オ】時俱入无餘涅槃其塔即入地至金輪際方乃停住其三藏教在舍利前已滅沒經ニ一百年唯此淨法與舍利塔及諸阿羅漢一時滅沒爾時無上正法永滅不現（云云取意）

《訓》

問ひて曰く。言ふ所の「經道滅盡の時」とは、何れの時をか指すや。答ふ。諸師異説す。且く『群疑論』の第三に依るに、三家の説有り。一には、「信行禪師の義」を出だして、之を破す。二に云く、「刀兵劫の時」を指す。

彼の時の人壽十歲、身の長け二肘。更に、甚深の戒定慧學を修せ

ず。唯だ、念仏のみして極樂に生ず、と（云云）三には、「慶友所説の『法住記』」を引きて云く。

刀兵劫の後、人壽漸く增長して百年に至るに、十六羅漢、三藏教法を以て、世間に流行せん。人壽六萬歳の末、七萬歳の初めに至らんに、諸阿羅漢、仏舍利を集めて、宝塔を造りて供養し、辭謝の語を説きて、一時に俱に無余涅槃に入らん。その塔、即ち地に陥入して、金輪際に至りて、方に乃ち停住せん。其の三藏教、舍利の前に在りて已に滅沒せん。一百年を経んに、唯だ此の淨法と舍利塔、及び諸ろの阿羅漢と与に、一時に滅沒せん。その時に、無上正法、永く滅して現ぜざらん、と（云云。取意）

註

（1）「信行」、三階教開祖、梁武大同六年（五四〇）～隋開皇十四年（五九四）（矢吹慶輝著『三階教之研究』『教祖信行禪師伝』（岩波書店、一九七三））。

（2）「刀兵劫（刀兵災）」↓「三災」三種の災患の意。小の三災と大の三災とがある。「刀兵災（刀兵劫）」は小の三災の一つ。手に執るものが全て刀となり、互いに傷つけ殺す（『望仏』二、二五一〇頁）。「小の三災」世界の存続期に衆生の壽命が八萬歳と一〇歳との間で二十期くり返し、人間の壽命が十歳に低下した時交互に起こる災厄（『中仏』上、五七三頁）。

（3）玄奘訳『大阿羅漢難提蜜多羅所説法住記』（『大正藏』四九、十二頁下）。

（4）「無余涅槃」、一切の煩惱を断ち切つて未來の生死の原因を無くした者が、なお身体だけを残しているのを有余涅槃といい、その身体までもなくした時、無余涅槃という（『中仏』下、一六四七頁）。

- (5) 「陷入」、落ち込む・はまりこむ・陥没（おちいる・おちこむ・へこむ）（『大漢和』十一、九一一頁）。
- (6) 「金輪際」、水面より八万由旬の下に厚さ三億二万由旬の金輪あり。この金輪のあるところを指す（世界の最も低い所に下から風輪・水輪・金輪がある）（『織田仏』五〇七、五〇八頁）。
- (7) 「正法」正しい理法・正しい真理・真実の教え・仏の教え・教えが正しく世に行われる期間（『中仏』中、八九八頁）。
- (8) 懷感『釈淨土群疑論』（『大正藏』四七、四八頁上）。

問曰若如此兩^二者何故善導禮讚等云^一下萬年三寶滅此經住百年等^ト乎^ヤ答分^ニ正像末三時^一者約^ニ證^一行興廢^一途^ニ也^一非^ニ摠^一盡^ニ佛法住世時^一也是故若約^ニ第二家^一從^リ萬年^一以後至^ニ刀兵劫時^一若約^ニ第三家^一從^リ萬年^一以後至^ニ七萬歲時^一也是^ニ以^一環興師釋此止住百歲文^ニ云有^一釋迦正法五百年像法千年末法萬歲一切皆過故云滅盡法雖滅已^一佛以慈悲^一【六丁ウ】憐^レ苦衆生^一獨^リ留^メ此經^一百年濟度^ニ此恐^一不然非^ニ唯法住違^一諸聖教^一事亦未^レ盡^キ

《訓》

問ひて曰く。若し此の兩説のごとくならば、何が故ぞ善導の『礼讚』等に

万年三宝滅此經住百年^⑨

等と云ふや。

答ふ。正像末の三時を分つことは、証行の興廢に約する一途の説なり。惣じて、仏法住世の時を尽すには非ざるなり。是の故に、若し、第二家の説に約せば、万年従り以後、刀兵劫の時に至る。若し、第三

家の説に約せば、万年従り以後、七万歳の時に至るなり。是を以て、環興師、この「止住百歲」の文を釈して云く。

有るが説く。「釈迦の正法五百年、像法千年、末法万歲、一切皆過ぐるが故に、滅尽と云ふ。法、滅し已ると雖も、仏、慈悲を以て、苦の衆生を憐れんで、独りこの『經』を留めて、百年濟度せん^⑭。此れ、恐らくは然らず。唯だ法住、諸ろの聖教に違するのみに非ず。事も亦未だ尽きず^⑮。

註

- (9) 善導『往生礼讚』（『大正藏』四七、四四一頁、下）。
- (10) 「正像末」、仏の入滅後において教えの行われる時機を正法（教と行と証とが具現されていた時期）と像法（教と行の二つが存在して正法時に似た時期）と末法（教えのみあつて行と証との欠けた時期）（『中仏』中、八八二頁）。
- (11) 「興廢」、盛んになることと廢れること・滅んだものを再興すること（『日国』八、四一一〜四一二頁）。
- (12) 「第三家説」、懷感『釈淨土群疑論』所引『法住記』（前掲）。
- (13) 「懷興師」、六八一〇年。新羅熊川州の人（『三国遺事』「大德懷興」へ『大正藏』四九、一〇一二頁下）参考）。
- (14) 【参考】慧遠『無量壽經義疏』（『大正藏』三七、一一六頁上）。
- (15) 「事」、事柄・現れる現象・個別的現象（『中仏』中、六一六頁）。

故今依^ニ法住記^一云^ニ佛滅度時^一以^ニ无上法^一附^コ嘱^ス十六大阿羅漢并^ニ諸眷属^一令^シ護持^セ使^シ不^ニ滅没^一刀兵劫時暫雖^ニ法^一【335下】滅^ス人壽漸增^ニ至^ニ百歲^一位羅漢與^ニ眷属^一顯^セ正法^一乃至^ニ此州^一人壽六萬歲時^一无上正法流行^ニ世間^一熾然^一不^レ息至^ニ人壽七萬歲時^一無上佛法永滅滅時^一阿羅漢造七

寶塔ノ釋迦如來遺身都集ニ其内ニ時羅漢與諸眷屬遷テ供養已昇虚空ニ作如レ是言敬禮世尊釋迦如來應正等覺我受教勅護持正法及與天人作諸饒益法藏已没^(マウニシメ)有緣已周今辭滅【七丁オ】度^(セムキ)此語^(コノコト)已^(マデ)一時俱入无餘涅槃一時都婆便陷^(チボベンケン)入地^(ニチ)至金剛際^(ニチ)方乃停住^(ハタチトドマ)爾時佛法永滅不現此無間有七萬俱胝獨覺一時出^(デ)現^(ニチ)至人壽八萬歲時獨覺聖衆復皆滅没^(セム)次復弥勒如來出^(デ)世^(ニチ)

《訓》

故に今『法住記』に云ふに依るに

仏、滅度の時、無上の法を以て、十六大阿羅漢並びに諸ろの眷属⁽¹⁷⁾に附嘱⁽¹⁸⁾す。それをして、護持⁽¹⁹⁾せしめて、滅没⁽²⁰⁾せざらしむ。刀兵劫の時、暫く法滅すと雖も、人壽漸く増して、百歳に至らん位⁽²¹⁾に、羅漢、眷属と与に正法を顯説せん。乃至、此の州の人壽六万歳の時まで、無上正法、世間に流行⁽²²⁾して、熾然⁽²³⁾として息まざらん。人壽七万歳の時に至りて、無上仏法、永く滅没せん。時に阿羅漢、七宝の塔を造りて、釈迦如來の遺身を都てその内に集めん。時に羅漢、諸ろの眷属と与に、塔を遷りて供養し已りて、虚空に昇りて、是のごとき言を作さく。世尊釈迦如來應正等覺に敬礼⁽²⁴⁾す。我れ、教勅⁽²⁵⁾を受けて、正法を護持す。及び天人の与めに諸ろの饒益⁽²⁶⁾を作す。法藏、已に没しぬ。有緣⁽²⁷⁾、已に周し。今、辭して滅度せん。此の語を説き已りて、一時に俱に無余涅槃に入らん。時に卒都婆、便ち地に陥ち入りて、金剛際に至りて、方に乃ち停住⁽²⁸⁾せん。その時に、仏法、永く滅して現ぜざらん。この無間に七万俱

眠の独覺有りて、一時に出現せん。人壽八万歳の時に至りて、独覺⁽³⁰⁾の聖衆、復た皆滅没せん。次に、復た弥勒如來、世に出でん⁽³¹⁾。

註

- (16) 「滅度」、悟りの境地・無余涅槃・亡くなること・入滅・(『中仏』下、一六五七頁)。
- (17) 「眷属」、取り巻き・親しい随伴者・従者・仲間・仏菩薩に付き従うもの・仏の弟子(『中仏』上、四〇八頁)。
- (18) 「附属」、師匠が弟子に仏法の奥義を授けること(『中仏』下、一四四七頁)。
- (19) 「護持」、守り保つこと(『中仏』上、四七六頁)。
- (20) 「滅没」、滅び失せる・消えて亡くなる(『大漢和』七、一七七頁)。
- (21) 「位」、時間的段階(『大正藏』二九、四八頁中)。
- (22) 「流行」、ゆきわたる・広まり行われる(『大漢和』六、一一二七頁)。
- (23) 「熾然」、火などの勢いが盛んな様(『日国』六、九二五頁)。
- (24) 「遺身」、死体(『中仏』下、一六八五頁)。
- (25) 「敬礼」、敬い拝む(『中仏』上、三〇一頁)。
- (26) 「教勅」、仏の戒め・命令・いいつけ(『中仏』上、二九五頁)。
- (27) 「饒益」、人々に利益を与えること・利益し救うこと(『中仏』下、一三〇七頁)。
- (28) 「有緣」、存在を成立せしめる間接的原因・自らとかかわり合いのある人(『中仏』上、九九頁)。
- (29) 「停住」、とどまること(『日国』九、五五六頁)。
- (30) 「独覺」、独力でさとりむかう人・他人の教えを聞かず自分独自の方法でさとり人(『中仏』下、一二五七頁)。
- (31) 玄奘訳『大阿羅漢難提蜜多羅所説法住記』(『大正藏』四九、十三頁上

（下）。

以此言^テ之^ハ當^ニ人^ノ壽^ヲ七^ノ萬^ノ歲^ヲ時^ニ無^ク上^ニ正^ニ法^ヲ方^ニ永^ク滅^{スル}沒^{スル}故^ニ云^フ經^ノ道^ヲ滅^{スル}盡^{スル}十六大聖^ノ取^テ佛^ノ遺^ヲ身^ヲ立^ニ一^ノ塔^ヲ時^ニ唯^ニ弘^ニ此^ノ淨^ノ土^ノ之^ノ教^ヲ至^ニ滿^{スル}百^ノ年^ヲ方^ニ取^テ滅^{スル}度^ヲ時^ニ都^ニ婆^ノ便^ニ陷^ニ入^ニ地^ニへ取^テ意^ヲ略^{スル}鈔^ヲ此^ノ師^ノ義^ヲ亦^ニ同^ニ論^{スル}第^ニ三^ノ家^ノ義^ヲ准^ニ可^ク知^ル依^テ此^ノ等^ノ雖^ニ時^ノ節^ノ有^ニ異^ニ俱^ニ非^ニ限^ニ淨^ノ土^ノ教^ヲ有^ニ佛^ノ舍^ノ利^ノ有^ニ護^ニ持^ニ聖^ノ衆^ノ此^ノ三^ノ種^ノ至^ニ法^ノ滅^{スル}後^ニ滿^{スル}百^ノ歲^ヲ共^ニ滅^{スル}發^ニ心^ノ勝^ノ緣^ヲ唯^ニ不^ニ限^ニ一^ノ種^ノ也^ニ且^ニ置^ク此^ノ事^ヲ若^シ【七^ノ丁^ノウ】依^テ第^ニ二^ノ家^ノ義^ヲ唯^ニ見^ニ三^ノ災^ノ苦^ノ逼^{スル}衆^ノ生^ヲ起^{シテ}大^ノ慈^ノ悲^ノ心^ヲ修^{スル}慈^ノ悲^ノ行^ヲ等^ニ此^ノ等^ノ豈^ニ可^ク非^ニ菩^ノ提^ノ行^ヲ乎^ヤ如^シ我^ノ世^ノ尊^ノ釋^ノ迦^ノ牟^ノ尼^ノ最^ニ初^ニ發^ニ心^ノ因^ノ緣^ヲ中^ニ上^ニ

《訓》

此れを以て之を言はば、人壽七萬歳の時に當りて、無上正法、方に永く滅没せん。故に「經道滅尽」と云ふ。十六大聖、仏の遺身を取りて一塔を立てん時に、唯だ、此の淨土の教へのみを弘めん。百年を滿ずるに至りて、方に滅度を取らん。時に卒都婆、便ち地に陥ち入らん（取意略鈔）

此の師の義も亦『論』の第三家に同ず。義、准じて知るべし。此れ等の説に依るに、時節に異り有りと雖も、俱に淨土の教へのみに限らず、仏舍利有り、護持の聖衆有り。此の三種、法滅の後、百歳を滿ずるに至りて共に滅せん。発心の勝縁、唯だ一種のみに限らざるなり。且くこの事をば置く。若し、第二家の義に依らば、唯だ三災苦逼の衆生のみを見て、大慈悲心を起して、慈悲の行を修する等。これ等、豈に、菩提の行に非ざるべしや。我が世尊釈迦牟尼の最初発心の因縁の中に説くがごとし。

註

- (32) 「大聖、偉大な聖者・仏・立派な人・尊い人・神通力を得た人（『中仏』中、一一一九頁）。
- (33) 環興『無量寿経連義述文讀』（『大正藏』三七、一七〇頁中（下））。
- (34) 「此師」、懷興（前掲）。
- (35) 「論」、懷感『釈淨土群疑論』（前掲）。
- (36) 「第三家」、慶友所説『法住記』に依る解釈。
- (37) 「第二家義」、刀兵劫の時節。
- (38) 「苦逼」、苦しめること（『中仏』上、三四三頁）。

報恩經第二發菩提心品云爾時喜王菩薩復白佛言世尊菩薩知恩自發菩提心報恩教一切衆生令發菩提心者如來世尊於生死時初發菩提心因何事發佛言善男子過去久遠不可計劫生死中以重煩惱起身口意業故【33上】墮在八大地獄所謂阿訶訶地獄阿婆婆地獄阿達多地獄銅釜大銅釜黑石大黑石乃至火車地獄我於爾時墮在火車地獄中共兩人并挽火車牛頭阿傍在車【八丁オ】上坐繫臂一切齒張目吹火口眼耳鼻烟炎俱起身体殊大臂脚蟠結其色赤黑手執鐵杖隨而鞭之

《訓》

『報恩經』の「第二發菩提心品」に云く。

その時に、喜王菩薩、復た仏に白して言く。「世尊、菩薩、恩を知り、自ら菩提心を発す。恩を報い、一切衆生を教へて、菩提の心を発せしむるは、如來世尊、生死の時に於いて、初めて菩提心を発すること、何事に因りてか発せるや」。仏の言く。「善男子、過去久遠不可計劫生死の中、時に重煩惱を以て、身口意業を起すが

故に、八大地獄に墮在す。所謂、阿訶訶地獄、阿婆婆地獄、阿達多地獄、銅金、大銅金、黒石、大黒石、乃至、火車地獄なり。我れ、その時において、火車地獄の中に墮在して、兩人と共に、并に火車を挽く。⁽⁴³⁾牛頭阿傍⁽⁴⁶⁾、車の上に在りて坐す。脣を⁽⁴⁸⁾嗽⁽⁴⁸⁾へ、齒を切にして、目を張りて、火を吹く。口・眼・耳・鼻、烟炎、俱に起る。身体殊大にして、臂脚⁽⁵²⁾蟠結⁽⁵³⁾せり。其の色、赤黒にして、手に鉄杖を執る。随ひて之を鞭つ。⁽⁵⁵⁾

註

- (39) 「生死」、生と死・迷いの世界・迷いのあり方(『中仏』中、八五五頁)。
 (40) 「善男子」、在家の聴衆に呼び掛けていう言葉・正しい信仰を持つ人(『中仏』中、一〇四四頁)。
 (41) 「久遠」、久しい間・過去・遠い過去・永遠の昔(『中仏』上、三二二頁)。
 (42) 「劫」、極めて長い時間のこと・永遠の時間(『中仏』上、四二三頁)。
 (43) 「墮在」、上方から落下する意(『中仏』中、一一四三頁)。
 (44) 「并に(ともに)」、ともにする(同じく・同じくする)・ならば(よりそう)(『大漢和』四、五二〇～五二二頁)。
 (45) 「挽く」、「引く」に同じ(『大漢和』五、二三九頁)。
 (46) 「牛頭」、牛の頭の形をした地獄の鬼(『中仏』上、四八九頁)。
 (47) 「阿傍」、地獄の獄卒のこと(『中仏』上、二二頁)。
 (48) 「嗽(かん)」、意思が堅い、口を閉じる(『大漢和』八、一一九七頁)。
 (49) 「切齒」、齒を食いしぼる・激しく憤る(『大漢和』二、一二九一頁)。

頁)。

- (50) 「張目」、目を見はる・目を大きく開く・目をむく(『大漢和』四、七三四頁)。

- (51) 「烟炎(えんえん)」、煙と炎(『大漢和』七、四七四頁)。

- (52) 「殊大(しゅだい)」、↓「殊」暗い・愚か(『大漢和』三、六八五頁)。

- (53) 「臂脚」↓「臂」肘から手首まで(一の腕)・肩から肘まで(二の腕)・前足(『大漢和』九、三七四頁)。

- (54) 「蟠結」、わだかまり結ばれる(『大漢和』十、八九頁)。

- (55) 「鞭」、ムチ・鞭打つ(『大漢和』十二、一七二～一七三頁)。

我時苦痛^{シテ}怒力^{カメ}挽車^ヲ力勵^ヲ前進^ニ時我徒^ニ伴劣弱^ニ少力^{ナリ}劣弱^ニ在後^ニ是時^ニ牛頭阿傍^ニ以鐵刃^ヲ刺腹^ヲ鐵杖^ヲ鞭背^ヲ血出沐浴^ニ隨體^ニ而流^ル其人苦痛^ニ高聲^ニ大喚^ニ苦痛難^シ忍^セ或称^{ハシ}父^ヲ母^ヲ或称^{ハシ}妻^ヲ子^ヲ雖作^{トモ}如是唱^シ喚^シ無益^ニ於^ニ已^ニ我時見^ニ是受^ニ大苦惱^ヲ心生哀^ニ慙^ニ因慈心生^ニ故發苦提心^ヲ為此衆罪人^ノ故勸^ス請牛頭阿傍^ニ此罪人者甚可^ハ憐^ニ慙^ニ少復加哀^ニ垂慈^ニ憐愍^ニ牛頭阿傍聞^キ已^ニ心生^{シテ}嗔恚^ヲ尋以鐵刃^ヲ前^ニ刺^ス我頸^ヲ尋時命終^ニ即得^ニ脫^ニ於火車地獄百劫中罪^ヲ我以^ニ【八丁ウ】發^ス阿耨多羅三藐三菩提心^ヲ故即脫^ニ火車地獄之罪^ニ

《訓》

我れ、時に苦痛して力を怒らかして車を挽く。力を励して前に進む。時に、我が徒伴⁽⁵⁶⁾、劣弱小力なり。劣弱にして後に在り。是の時に、牛頭阿傍、鉄刃を以て腹を刺す。鉄杖をもて背を鞭つ。血出でて沐浴⁽⁵⁷⁾す。体に随ひて流る。その人苦しき痛んで、高声に大きに喚ぶ。苦痛忍び難し。或は父母を称し、或は妻子を称す。是

のごときの唱喚⁽⁵⁸⁾を作すと雖も、己れを益すること無し。我れ、時に是の大苦悩を受くるを見て、心に哀愍⁽⁵⁹⁾を生ず。慈心生ずるに因るが故に菩提心を発す。此の衆罪人の為めの故に、牛頭阿傍に勧請⁽⁶⁰⁾す。此の罪人は、甚だ憐愍⁽⁶¹⁾しつべし。少しきに復た哀を加へて、慈を垂れて憐愍せられよ。牛頭阿傍、聞き已りて心に瞋恚を生じて、ついで鉄刃⁽⁶²⁾を以て、前に我が頸を刺す。ついで時に命終す。即ち、火車地獄百劫の中の罪を脱することを得たり。我れ、阿耨多羅三藐三菩提心を発すを以ての故に、即ち火車地獄の罪を脱る。

註

- (56) 「徒伴(ずはん)」、なかま・一緒にことを行う者・共犯者(『日国』七、一〇二二頁)。
(57) 「沐浴」、水を浴びて身を清めること・水浴び(『中仏』下、一六六七頁)。
(58) 「喚」、呼ぶ・わめく・泣く・招く(『大漢和』二、一〇八八頁)。
(59) 「哀愍」、人々を哀れみ慈しむこと(『中仏』上、五〇六頁)。
(60) 「勧請」、うながすこと・教えを請うこと(『中仏』上、二二六頁)。
(61) 「憐愍」、あわれむこと・あわれみ・同情(『中仏』下、一七五五頁)。
(62) 「尋で(ついで)」、ついで・まもなく(『大漢和』四、三六〇三七頁)。

佛告^(ハク)喜王^(ニヒキシ)挽火車^(ノノハ)者^(ハ)今我身是因^(ナリ)菩提心^(ニ)故疾得^(ニ)成佛^(スルコトヲ)是故當^(シ)知^(ル)一切衆生發菩提心其事非^(ニ)一^(ニ)或因慈心^(ニ)或因悲心^(ニ)或因施心^(ニ)或因慍心^(ニ)或因歡喜^(ニ)或因煩惱^(ニ)或因恩愛別離^(ニ)或因怨憎和合^(ニ)或因親

近^(スルニ)善知識^(ニ)或因惡友^(ニ)或因見佛^(ニ)是因聞法^(ニ)是故當^(シ)知^(ル)一切衆生發菩提心各各不同^(ナリ)。〔此經上文亦緣^(シテ)法滅^(ヲ)爲^(コトヲ)發^(ス)心因緣^(ト)可見之〕

《訓》

仏、喜王に告げたまはく。火車の挽きしは、今、我が身是れなり。菩提心に因るが故に、疾く成仏することを得。是の故に、当に知るべし。一切衆生の發菩提心、その事、一に非ず。或は慈心に因り、或は悲心に因り、或は施心に因り、或は慍心に因り、或は歡喜に因り、或は煩惱に因り、或は恩愛別離⁽⁶³⁾に因り、或は怨憎和合⁽⁶⁴⁾に因り、或は善知識に親近するに因り、或は惡友に因り、或は見仏に因り、或は聞法に因る。是の故に、当に知るべし。一切衆生の發菩提心、各各に不同なり。〔此の『經』の上の文にも亦法滅を緣じて、発心の因縁と為ることを説く。之を見るべし〕

註

- (63) 「恩愛別離」、(八苦の一つ)父母妻子のような恩愛のあるものと別れること。(『中仏』上、一六六頁)。
(64) 「怨憎和合」↓「怨憎」怨み憎むこと(『日国』三、九四頁)。「和合」調和・種々の要素が結合して一つのものを構成する・混ざる諸の原因が協同し調和して働くこと・結合すること(『中仏』下、一七八二〜一七八三頁)。
(65) 「善知識」、高い徳行を備えた人物・ブツダの教えを継承し伝播する人々・正しい道に導く人(『中仏』中、一〇四〇頁)。
(66) 「親近」、親しくなること・親しみ近づくこと(『中仏』中、九四九頁)。
(67) 「惡友(あくう)」、悪い友達(『中仏』上、八)。
(68) 『大方便佛報恩經』二(『大正藏』三、一三六頁上)中。

(69) 『方便佛報恩經』二(『大正藏』三、一三五頁下)。

此則釋尊爲^レ罪人^ニ之昔見衆生苦^ニ發菩提心^一有^ニ慈悲^一人皆以可同^ニ之^一經文既云^ニ以重煩惱起身口意業故等^一全非^ニ變化相^一也謂^ニ爲^一釋尊因事莫^ニ作^一過分思^一而已又前所^ニ【九丁オ】^一出緣發心行相顯^ニ故^一聞^ニ佛教名^一【33下】字^ニ即可^一爲^ニ發心因緣^一未^ニ必^一可^ニ待^一文句^一

《訓》

此れ則ち、釈尊、罪人たりしの昔、衆生の苦を見て菩提心を發す。慈悲有らん人は、皆以て此に同ずべし。『經』文に既に「以重煩惱起身口意業故」等と云へり。全く變化の相に非ざるなり。釈尊の因事たりと謂ひて、過分の思ひを作すこと莫れ、のみ。

又、前に出だす所の「緣發心」は、行相顯なるが故に、纔に仏教の名字を聞かば、即ち發心の因緣たるべし。未だ必ずしも文句を待つべからず。

註

(70) 「因事」、因たるもの・因緣(『中仏』上、八七頁)。

(71) 「緣發心」、表員『華嚴經文義要決問答』二(『卍日統藏經』八、四二七頁中)。卷上七丁ウ。

(72) 「行相」、はたらき・心のはたらき・「行」とは心がおもむく事「相」とはこれを受け取る事・すがた・ありさま(『中仏』上、二九四頁)。

(73) 「鹿顯」↓「鹿」粗い・疎い・雜・粗末(『大漢和』十二、九二五頁)。

(74) 「名字」、名称と形体・名目と文字(『中仏』下、一五九三頁)。

如^ニ大日經^一第六三三摩耶品第二十五云^ニ佛言^一有三種法相續除障^ニ相應生^一名三三摩耶云何彼法相續生所謂初心不觀自性從^レ此發慧如^ニ實智生^一離^ニ無盡分別網^一是名第二心菩提相無分別正等覺^ニ秘密主彼如^ニ實見^一已觀^ニ察^一無盡衆生界悲自在轉無緣觀菩提心生所謂離一切戲論安置衆生皆令住^ニ於無相菩提^一是名三三昧耶句^一(已上經文)

《訓》

『大日經』の第六「三三摩耶品」第二十五に云ふがごとし。

仏の言く。三種の法有り。除障を相續して、相應して生ずるを「三三摩耶」と名づく。云何が、彼の法、相續して生ずる。所謂^ニ初心に自性を觀ぜず^一、これ従り慧を發して、如実の智生じて無尽分別網を離る。是を「第二心菩提の相、無分別正等覺の句」と名づく。秘密主、彼れ、実のごとく見已りて、無尽衆生界を觀察して、悲、自在にして転ず。無緣觀の菩提心生ず。所謂、一切の戲論を離れて、衆生を安置して、皆、無相の菩提に住せしむ。是を「三三摩耶の句」と名づく(已上、『經』文)

註

(75) 「障」、障害・さわり・聖道の妨げとなるもの・抵抗・邪魔(『中仏』中、八二八頁)。

(76) 「相應」、結びつく・心と心作用が結びつくこと・一体になる(『中仏』中、一〇五八頁)。

(77) 「三三摩耶」↓「三摩耶」実在と現象の差別のなくなった境地・仏のさとりと合致した境地(『中仏』上、六〇七頁)↓「三三摩耶句」

- 「三」とは身口意の三業のこと、衆生の三業が仏の三密と平等になることを述べた句（『中仏』上、五七四頁）。↓「三密」密教で言う身口意業の三業、その三つが仏のはたらきとみなされる時にそれぞれ身密口密意密と呼ぶ。大日如来のさとりの世界（『中仏』上、六〇八頁）。
- (78) 「初心」、さとり最初の心・「初発心」の略（『中仏』中、九二二頁）。↓「初発心」初めてさとりを求める心を起こすこと（『中仏』中、九二七頁）。
- (79) 「自性」、それ自体の定まった本質（『中仏』中、六六六頁）。
- (80) 「慧」、道理を選び分け判断する心作用・分別判断（『中仏』上、一九九頁）。
- (81) 「如実」、真実の道理にかなうこと・あるがまま・究極の真理（『中仏』下、一三〇八頁）。
- (82) 「分別」、外的な事物にとらわれた断定・誤った認識・（二つ以上の）場合を分けて区別して説くことと考え（『中仏』下、一四七四頁）。
- (83) 「網（もう）」、むれ（『中仏』下、一六六〇頁）。
- (84) 「相」、すがた・かたち・ありさま・様相・あらわれ・特質・特徴・性質（『中仏』中、一〇五三頁）。
- (85) 「正等覚」、諸仏の無上の正智・正しく目覚めさとした人のこと（『中仏』中、八八八頁）。
- (86) 「秘密主」、金剛手秘密主・金剛薩藉・夜叉王の異名・金剛薩藉（『中仏』下、一三九八頁）。
- (87) 「觀察」、見つめること・見通すこと・物事を心に浮かべて細かに明らかに考えること・よく熟視すること・考察すること・判断・認める・本性を見通すこと（『中仏』上、一三四頁）。
- (88) 「悲」、他人の苦しみを自分の悲しみとすること・苦しを除くあわれみ（『中仏』下、一三七八頁）。
- (89) 「自在」、自己の欲するがままであること・それ自身によって存在すること・仏菩薩に備わる力（『中仏』中、六四八頁）。
- (90) 「転」、起こる・はたらく・活動する・展開する・存在する・めぐら

す（『中仏』下、一二〇九頁）。

(91) 「無縁」、原因や条件のないこと・理想としてはありとあらゆるものを平等と観じ、空を認めるが故に絶対の慈悲は対象をもたない・（『中仏』下、一六〇七頁）。

(92) 「観」、真理を観ずること・見通す（『中仏』上、一二七頁）。

(93) 「戲論」、言葉・相・概念・分別・分別が言葉に表れること・妄分別（『中仏』上、三八九頁）。

(94) 「無相」、特別の相（形相）をもたないこと・「無」であるという本質・差別の相を離れていること（『中仏』下、一六三四頁）。

(95) 『大日経』（『大正蔵』十八、四十二頁中）。

同經疏第十九云此三中最初但能發心誓欲成佛然未正觀如來功德不能了知以何法而得成佛【九丁ウ】未正觀有照之慧但有求佛之心而未達自巳身之本性有何功德但有此惠性能於生死中最初發心而求佛果此是初三昧耶也從此心後得如實智生

《訓》

『同経の疏』の第十九に云く。

此の三の中、最初は、但だ能く心を発して、誓ひて成仏せんと欲ふ。然るに、未だ能く正しく如来の功徳を觀ぜず。何の法を以て成仏することを得と了知すること能はず。未だ能く具さに、觀照の慧、有らず。但だ求仏の心のみ有り。而も、未だ能く自己身の本性に何の功徳か有ると了達せず。但だ此の惠性のみ有りて、能く生死の中において最初に発心して仏果を求む。これは是れ「初めの三昧耶」なり。この心従り後に、如実の智、生ずることを得。

註

- (96) 「了知」、明らかに知ること・認識する・はつきり知る（『中仏』下、一七三八頁）。
- (97) 「観照」、知恵をもって観じ明らかに知ること（『中仏』上、二三六頁）。
- (98) 「了達」、さること・理解が行き届いたこと・見通すこと（『中仏』下、一七三七頁）。
- (99) 「恵性」、↓「慧性」智慧たるもの（『中仏』上、一二八頁）。

謂能以_レ慧決_一択_一了_二知_下此是功德此非_一功_一徳等は處非處邪正之相_上以_三得_二如_一實智_二故離_二無盡分別忘見之網_一善滅_レ諸戲論安_二住_二真實相_中然_モ此實智即是菩提心三昧耶是等義然此心等發_レ名_二三昧耶_一也初_一心雖_モ未_二ダ_三具_二實智_一然亦誓_二成_二佛度_二人_一即是等心故亦得_二三昧耶_一名_二也_一從_二此心_一第二心相續_二無間無障_一故次即於此真實句中_二了_二眞假_一已_一一切無盡衆生而起_二大悲_一【十丁オ】心是第三_二三昧耶_一也等（云云）〈解曰如_レ次初菩提心第二智第三大悲也上_レ所_二三句義_中菩提心爲_レ因大悲爲_レ根方_一便爲_二究竟_一云云第二第三前後會_二尺具_一如此次疏文_二恐_レ煩_一不引〉

《訓》

謂く。能く慧を以て決択して、これは是れ功德・これは非功德、等、是処非処・邪正の相を了知す。如実智を得るを以ての故に、無尽分別忘見の網を離る。善く諸ろの戲論を滅して、真實相の中_{（中）}に安住す。然も、此の実智は、則ち是れ菩提心なり。三昧耶は、是れ「等」の義なり。然れば、この心、等しく発れば、「三昧耶」と名づくるなり。初心に未だ実智を具せずと雖も、然も亦成仏し

て人を度せんと誓ふ。即ち是れ「等心」なるが故に亦「三昧耶」の名を得るなり。此の心従り第二心相續して、無間無障なるが故に次に即ち此の真實句の中において、真・仮を了_{（了）}り已りて、一切無尽の衆生に、而も大悲心を起す。是れ、第三の三昧耶なり、等と（云云）

〈解して曰く。次のごとく、初めは菩提心、第二は智、第三は大悲なり。上の所説、三句義の中には、菩提心を因とし、大悲を根とし、方便を究竟とす、と云云。第二、第三の前後の会釈、具さにはこの次の『疏』の文のごとし。煩を恐れて引かず〉

註

- (100) 「決択」、「決」は決断、「択」は簡択（えらぶ）の意・最も勝れているところを選び取る・結論を出す（『中仏』上、三八二頁）。
- (101) 「処」、心作用が起るための場・ことわり・道理（『中仏』中、八二四頁）。
- (102) 「是処非処」↓是非の理（『中仏』中、一〇〇七頁参照）。
- (103) 「忘見」、↓「妄見」間違つた考え・散乱し迷つた心・無いものをあつという見解（『中仏』下、一六六一頁）。
- (104) 「戲論」、差別的対立・無益な言論・実のない言語の往復・妄想（『中仏』上、三八九・三九〇頁）。
- (105) 「真實相」、真實なるものの姿（『中仏』中、九五四頁）。
- (106) 「等の義」、↓「等」等しい・平等・同時（『中仏』下、一二二九頁）。
- (107) 「実智」、真實の智慧・真實に通じた智慧・根本智（方便智）の対（『中仏』中、七〇三頁）。
- (108) 「具」、具わること・具わるところ・助けとなる手段（『中仏』上、

三二一頁。

(109) 「無間」、ただちに・直後に・絶え間のないこと・続くこと・欠点がないこと(『中仏』下、一六一五頁)。

(110) 「真仮」、真実と方便・權実(『中仏』中、九四五頁)。

(111) 「了り」、さとの・理解する・会得する(『大漢和』一、四〇九頁)。

(112) 「大悲心」、大いなるあわれみの心・仏のあわれみの心(『中仏』中、一二三頁)。

(113) 一行「大毘盧遮那成仏經疏」(『大正藏』三九、七七七頁、中)。

(114) 「根」、器官でもあり能力でもあるという意・人間をさとりうながしていくもの(『中仏』上、五一〜五二頁)。

(115) 「方便」、方法・てだて・巧みな手だて・便宜な手段・工夫・すぐれた教化方法・十波羅蜜の第七(『中仏』下一五一七頁)。

(116) 「究竟」、究極の・物事の極限・至る・実現すること・達成すること(『中仏』上、三三四頁)。

【34.上】此中所^ノ一^ハ菩提心四發心中當緣發心未^ニ分^ニ別^セ邪正是非但有^リ求佛之心良以^ニ有^ニ稱性信心者誰何^ニ不^ニ如^ニ之乎如^ニ我等^ハ者恣飽法味徒分^ニ別^ニ上下佛法猶如漏^ニ初三昧耶^ニ於佛法有何所得乎至相大師於真正住持佛法出^ス顛倒見過^ニ有^リ三十二種偏病彼中出^{シテ}一偏病云上下空見有見衆生唯欲得^ニ學^ニ上佛法不肯^ニ學^ニ下佛法云云

《訓》

この中の所説の菩提心、四発心の中には「緣発心」に当れり。未だ邪正・是非を分別せず。但だ求仏の心のみ有り。良に以みれば、称性の信心有らん者は、誰か何ぞのごとくせざらんや。我等がごときの者は、恣まに法味に飽きて、徒に上下の仏法を分別す。猶し、初め

の三昧耶に漏れたるがごとし。仏法において何の所得か有るや。至相大師、真正住持の仏法において、「顛倒見の過」を出だすに、三十二種の偏病有り。彼の中にして一偏の病を出だして云く。

上下・空見・有見の衆生は、唯だ上の仏法のみを学することを得んと欲して、下の仏法を学することを肯ぜず、と(云云)

註

(117) 「緣発心」、表員『華嚴經文義要決問答』二(『卍日統藏經』八、四二七頁中)【参照】。

(118) 「是非」、良いと悪いとの区別・賛否の論義(『中仏』中、一〇一九頁)。

(119) 「称性」↓「称」ほめる・口に称えること(『中仏』中付、八二八頁)。「性」本体・本質・自性・原因・特性・固有の性質(『中仏』中、八二六〜八二七頁)。

(120) 「法味」、真理の本質・仏法の味わい(『中仏』下、一五二〇頁)。

(121) 「徒に」、何ら目的理由原因などがないのに物事をしたり状態が進行する様が甚だしい様を表す・むやみやたらに(『日国』一、一〇二八頁)。

(122) 「所得」、獲得・知覚・認識・所見・見解・物事を二つに分けてこれを取る彼を捨てる分別心(『中仏』中、九二四頁)。

(123) 「至相大師」、智儼、仁寿二年(六〇二)〜總章元年(六八二)(法藏撰『華嚴經伝記』三(『大正藏』五一、一六三頁中)参照)。

(124) 「住持」、世にとどまって教えを保つこと・仏法をたもち守ること(『日国』六、一二四〇頁)。

(125) 「顛倒見」↓「顛倒」我々の迷っている見方・正しい理に反すること・是を非とし非を是とすること・惑い・迷い(『中仏』下、一二二〇頁)。

(126) 「偏病」、惡癖・つむじ曲がり(『大漢和』一、八六四頁)。

(127) 「空見」、空にとらわれた間違った考え・一切の存在を全く否定する誤った見解（『中仏』上、三一五頁）。

(128) 「有見」、全ての存在に固定的実体の存することを認め、それを永久に自分のものとして所有できると考える見解（『中仏』上、一〇一頁）。

(129) 「不_レ肯（がへんぜず）」、承知しない・聞き入れぬ（『大漢和』九、二六三頁）。

(130) 智儼『華嚴五十要問答』（『大正藏』四五、五三三頁、下）。

嗚呼^ア臨^チ飢^ニ欲^{ハム}食^ニ寧^ロ嫌^{ハム}麤^ヤ餐^サ乎^ハ剩^サ色^メ香^ウ珍^ラ於^ヨ常^リ美^モ味^ツ滋^ネ於^ニ舌^ニ良^ニ道^ニ心^ニ行^ニ者^ニ佛^ニ境^ニ何^ニ物^ニ不^レ珍^ハ乎^ハ爲^ニ下^ニ彼^ニ【十^ニ丁^ニウ】戀^ニ在^ニ世^ニ而^ニ捨^ニ命^ニ思^ニ遺^ニ跡^ニ以^ニ折^ニ身^ニ之^ニ人^ニ竜^ニ窟^ニ之^ニ真^ニ影^ニ石^ニ面^ニ之^ニ雙^ニ輪^ニ如^ニ三^ニ遇^ニ在^ニ世^ニ置^ニ而^ニ不^レ論^ニ之^ニ至^ニ灌^ニ器^ニ之^ニ池^ニ曝^ニ衣^ニ之^ニ石^ニ戀^ニ慕^ニ銘^ニ心^ニ肝^ニ渴^ニ仰^ニ徹^ニ骨^ニ髓^ニ此^ニ心^ニ遂^ニ出^ニ三^ニ有^ニ之^ニ焚^ニ籠^ニ永^ニ遊^ニ四^ニ德^ニ之^ニ涼^ニ宮^ニ華^ニ嚴^ニ經^ニ云^ニ若^ニ有^ニ衆^ニ生^ニ供^ニ養^ニ如^ニ來^ニ所^ニ經^ニ土^ニ地^ニ及^ニ塔^ニ廟^ニ者^ニ亦^ニ具^ニ善^ニ根^ニ滅^ニ除^ニ一^ニ切^ニ諸^ニ煩^ニ惱^ニ患^ニ得^ニ賢^ニ聖^ニ樂^ニ宗^ニ家^ニ釋^ニ云^ニ此^ニ明^ニ遺^ニ跡^ニ利^ニ益^ニ也^ニ（云云）

《訓》

嗚呼、飢^あゑに臨みて食を欲はんに、寧ろ^⑬麤餐を嫌はんや。剩さへ、色香、常^{つね}よりも珍しく、美味、舌に^⑭滋し。良に道心の行者、仏境、何物か珍しからざらんや。彼の在世を恋ひて命を捨す。遺跡を思ひて、以て、身を折^{くだ}ぎしの人の為には、竜窟^⑮の真影・石面の^⑯双輪は、在世に遇ふがごとし。置きて之を論ぜず。器を灌^すぎたまひしの池・衣を曝^{さら}したまひしの石に至るまで、恋慕、心肝に銘^⑰じ、渴仰^⑱、骨髓に徹^⑲。この心、遂に三有^⑳の焚籠^㉑を出でて、永く四徳^㉒の涼宮に遊ぶ。

『華嚴經』に云く。

若し衆生有りて、如來の所經の土地、及び塔廟^⑳を供養する者は、亦、善根^㉑を具す。一切の諸煩惱の患ひを滅除し、賢聖^㉒の樂を得といへり。宗家、釈して云く。

此れは遺跡の利益を明かすなり、と（云云）^㉓

註

(131) 「鹿」、離れる・粗い・かすか・詳しくない・雑・粗末（『大漢和』十二、九二五頁）。

(132) 「滋し」、ます・育つ・しげる・うまみ・美味（『大漢和』七、一七九頁）。

(133) 「竜窟」、竜の住む岩窟・月窟（月の出る所）（『大漢和』五、一〇一二頁）（『大漢和』十二、一一一九頁）。

(134) 「真影」、まことの姿・それを書き写したもの（『日国』七、五四〇頁）。【参考】『釈迦譜』「釈迦留影在石室記第二十六」（『大正藏』五〇、六七頁下〜七〇頁上）。

(135) 「双輪」↓「仏足千輻輪」【参考】『仏祖統紀』「如來復現双足千輻輪相」（『大正藏』四九、一六七頁中）。

(136) 「龍窟之真影石面之双輪」、【参考】『解脱門義』「石面遺輻輪龍窟留真影」（『大正藏』七二、八七頁上）。『遺跡講式』「所謂龍窟留真影石面遺双輪」（『大正藏』八四、九〇三頁中〜下、九〇三頁下〜九〇四頁上）。

(137) 「曝す」、日光に当てておく・干す（『日国』六、二〇三頁）。

(138) 「心肝に銘ず」、心の底に刻みつけて決して忘れない・深く心底に^⑳しるす（『日国』七、五五三〜五五四頁）。

(139) 「渴仰」、仏を深く信じ仰ぐこと・人や事物を尊び敬うこと・憧れ慕うこと（『日国』三、七九二頁）。

(140) 「徹（とおる）」、とおる・とおす・とどく（『大漢和』四、九三一

頁。

(141) 「三有」、三種の生存（存在・有漏法の異名・「欲界」「色界」「無色界」（『中仏』上、五六〇頁）。

(142) 「焚籠」、【参考】『大日經義積演密鈔』【疏】焚籠者火籠也西京雜記曰天子以象牙為火籠謂之焚籠也一切衆生恒處三界為業煩惱之所燒逼不得出離如籠飛禽故云焚籠也（『正新纂統藏經』二三、六三三頁上）。

(143) 「四德」、四つのすぐれた性質・さとりりの四つの徳または境地（常樂我淨）（『中仏』中、七〇九頁）。

(144) 「塔廟」、仏塔と祖廟（『大漢和』三、二二七頁）。

(145) 「善根」、善い報いを受けるべき善い業因・善行・正しい行為（『中仏』中、一〇三〇頁）。

(146) 「賢聖」、知徳の卓絶した人・賢人と聖人（『大漢和』十、七八〇頁）。

(147) 「楽」、解脱の境地（『中仏』下、一七一〇頁）。

(148) 「華嚴經」（八十卷）（『大正藏』十、二七七頁、中）。

(149) 澄觀『大方広仏華嚴經疏』（『大正藏』三五、三三五頁下）三三六頁上）。

寶積經中、信^{スル}遺跡^ヲ功徳^ヲ上云彼雖^レ不見^ミ佛^ヲ而與^ト見^ル佛^ヲ同^シ云云、
雖^モ有^ニ如此勝利^ニ唯是有^一心之令^ラ然也道人^ノ心底^ニ未^タ必^ズ待^ニ此文
句^ヲ也然如^キ我等^ハ者不^レ見^ス金容^ヲ不聞梵音^ヲ希生^ニ乎邊夷^ノ殊俗^ニ適^{ヘリ}值^ニ於
如來遺教^ニ須^ニ聞^テ一字一句^ヲ如^ク三^ニ甘^ニ【十一丁才】露^ヲ空論^シ上下之勝劣^ニ
徒懷^ク空有^ノ之邊執^ヲ剩^ニ汝輕^ニ諸大乘宗^ヲ撥^ス大菩提心^ヲ是偏^ニ依^テ下^ニ被^レ催^テ狀苦
欣樂^ノ之心^ニ无^ニ愛佛樂法^ヲ之志^上也

『訓』

『寶積經』の中に遺跡を信仰する功徳を説きて云く。

彼は、仏を見ずと雖も、而れども仏を見ると同じ、と（云云）

このごときの勝利有りと雖も、唯だ是れ、有心の然らしむるなり。
道人^⑬の心の底に、未だ必ずしも、此の文句を待たざるなり。然るに、
我等がごときは、金容^⑭を見ず、梵音^⑮を聞かず、希に辺夷^⑯の殊俗^⑰と生じ
て、適ま、如來の遺教に値へり。須く一字一句を聞きて、甘露を嘗む
るがごとくすべし。空しく上下の勝劣を論じ、徒に空有の辺執を懷く。
剩さへ、汝、諸大乘宗を輕しめ、大菩提心を撥す。是れ偏に厭苦欣樂
の心に催されて、愛仏樂法の志無きに依りてなり。

註

(150) 『大宝積經』（『大正藏』十一、一〇頁、上）。

(151) 「道人」、出家修行者・求道者・菩薩（『中仏』下、一二四七頁）。

(152) 「金容」、仏または仏像などの金色に輝く姿（『日国』四、七二〇頁）。

(153) 「梵音」、ブラフマンの善き音声・仏の教え（『中仏』下、一五四二頁）。

(154) 「辺夷」、辺地の蛮族（『中仏』下、一四八五頁）。

(155) 「殊俗」、異民族・風俗の異なつた外国・異国（『中仏』中、八〇四頁）。

(156) 「甘露」、神々の常用する飲料・仏の教え・さとりの乾いた時にやつと手に入つた飲料（『中仏』上、二四八頁）。

(157) 「撥」はらう（私）・すてる（廢）・たちきる（『大漢和』五、三八七～三八八頁）。

如華嚴經云、設^ニ求^ニ出離^ヲ心下劣^ニ捨^ニ於最上佛智慧^ニ云云、我等有^レ
此過^ニ佛法^ニ無主耻^ニ哉悲哉^ニ奈何奈何^ニ矣今恨^ニ汝雖有^ニ求^ニ出離^ニ心^ニ
未^レ有^ニ樂^ニ佛智^ニ之思^ニ無^ニ大乘宿善^ニ初三昧耶未^レ萌^ニ依^ニ【344下】此^ニ

無^シ黨^ニ 乎^ニ 菩提心^ヲ之^ヒ 思^ヒ 反^テ 致^ス 違^テ 背^テ 之^ヲ 過^ヲ 豈^ニ 非^ニ 爲^ル 無^ト 慙^ト 乎

《訓》

『華嚴經』に云ふがごとし。

たとひ、出離^⑮を求むれども、心下劣にして最上の仏智慧を捨てたり、と〈云云〉

我等^オ、此の過有り。仏法、惟^ニに主無し。耻しき哉や、悲しき哉や。

奈何^{イカガせん}奈何。今恨むらくは、汝、出離を求むる心有りと雖も、未だ仏智を樂ふの思ひ有らず。大乘の宿善^⑯無くして、初めの三昧耶、未だ萌さず。これに依りて、菩提心を党^{カタリ}の思ひ無し。反りて違背の過を致す。豈に無慙^⑰とするに非ずや。

註

(158) 「出離」、生死を繰り返す迷いの世界を離れること・解脱・さとり・さとりへの道(『中仏』下、八一頁)。

(159) 『華嚴經』(八十卷)(『大正藏』十、一八七頁、上)。

(160) 「宿善」、かつて過去世につくられた善(『中仏』中、七九二頁)。

(161) 「党」、『法華經』音訓(一三八六)に「党 カタヒク」(『日国』三、七三三頁)【動詞】親しむ・摂す・助ける・かたよる・おもねる(『大漢和』十二、一〇三二頁)。

(162) 「無慙」、罪を罪として恥じないこと(『中仏』下、一六一八頁)。

若^シ 汝^レ 生^レ 法^ニ 滅^ト 時^ニ 雖^モ 遇^フ 弥^ノ 陀^ノ 教^ヲ 尚^シ 如^ク ナラム 今^ノ 時^ノ 若^シ 於^テ 餘^ニ 類^ニ 未^シ 必^ズ 一^ノ 途^ヲ 須^シ 止^ム 汝^ノ 之^ノ 非^ニ 理^ヲ 教^ヲ 訓^ヲ 隨^フ 自^ラ 之^ノ 因^ニ 緣^ニ 感^ニ 發^ス 何^ニ 況^ニ 若^シ 有^ニ 信^ニ 欲^ニ 海^ノ 水^ノ 劫^ノ 火^ノ 猶^モ 不^レ 障^レ 宿^ニ 成^ニ 堅^ニ 種^ニ 三^ノ 途^ヲ 猶^モ 聞^ク 法^ヲ 是^レ 經^ノ 論^ノ 定^一 也

《訓》

若し、汝、法滅の時に生ずれば、弥陀の教へに遇ふと雖も、尚し今時のごとくならん。若し余類においては、未だ必ずしも一途^⑰ならじ。須く汝が非理の教訓^⑱を止むべし。自らの因縁に隨いて感發^⑲しなん。何に況や、若し信欲有れば、海水・劫火も、猶し障へず。堅種を宿し成じつれば、三途^⑳にも、猶し法を聞く。是れ、經論の定説なり。

註

(163) 「一途」、一筋の途・同じ途・一の方法・あるやり方(『大漢和』一、四六頁)。

(164) 「教訓」、教え諭すこと(『日国』四、四二〇頁)。

(165) 「感發」、物事に感じ發奮すること・發奮させること(『日国』三、一三七八頁)。

(166) 「劫火」、宇宙の壊滅の時期(壊劫)の終末に起こる火災・世界終末の時の大火(『中仏』上、四二八頁)。

(167) 「三途」、地獄と餓鬼と畜生の世界(『中仏』上、五九二頁)。

【十二丁ウ】聞法已^レ 易^ニ 何^ニ 無^ニ 道^ノ 心^ヲ 乎^ニ 三^ノ 途^ヲ 猶^モ 聞^ク 何^ニ 況^ニ 人^ノ 間^ヲ 乎^ニ 海^ノ 水^ノ 劫^ノ 火^ノ 尚^モ 不^レ 障^レ 況^ニ 有^ニ 弥^ノ 陀^ノ 教^ヲ 時^ニ 乎^ニ 是^レ 故^ニ 言^フ 道^ノ 滅^ス 盡^ス 等^ト 者^ハ 摠^シ 約^シ 時^ニ 處^ニ 非^ズ 別^シ 約^シ 人^ノ 機^ニ 上^ニ 此^ノ 又^ニ 經^ノ 論^ノ 定^一 也^ニ 不^レ 能^ハ 委^ニ 曲^ニ 耳^ノ 又^ニ 當^ニ 知^ル 弥^ノ 陀^ノ 一^ノ 教^ヲ 至^ル 彼^ノ 時^ニ 者^ハ 依^ニ 今^ノ 時^ニ 有^ニ 經^ノ 道^ヲ 故^ニ 也^ニ 然^レ 執^シ 法^ノ 滅^ス 化^ス 儀^ヲ 撥^ク 去^セ 菩^ノ 提^ノ 心^ヲ 等^ヲ 者^ハ 今^ノ 時^ニ 經^ノ 道^ヲ 即^チ 可^レ 滅^ス 然^レ 者^ハ 弥^ノ 陀^ノ 一^ノ 教^ヲ 不^レ 可^レ 及^ニ 滅^ス 時^ニ 何^ニ 憑^ニ 止^ム 住^ニ 百^ノ 歲^ノ 文^ヲ 乎^ニ

《訓》

聞法、已に易し。何ぞ道心無からんや。三途、猶し聞く。何に況や人間をや。海水・劫火、猶し障へず。況や弥陀の教へ有らん時をや。是の故に「經道滅尽」等と言ふは、惣じて「時」・「処」に約して説く。

別して「人機」に約して説くには非ず。これも亦、経論の定説なり。
委曲⁽¹⁶⁸⁾に能はざるのみ。また当に知るべし。弥陀の一教、彼の時に至ることは、今時に経道有るに依るが故なり。然るに「法滅の化儀⁽¹⁶⁹⁾」を執して、菩提心等を撥去せば、今時の経道、即ち滅すべし。然らば、弥陀の一教、滅時に及ぶべからず。何ぞ「は住百歳」の文を憑⁽¹⁷⁰⁾まんや。

註

- (168) 「委曲」、事情や状態が詳しく細かなこと（『日国』一、八七六頁）。
(169) 「化儀」、教化の仕方・教える方法・手段・（『中仏』上、三六三頁）。
(170) 「憑」、「たのみ」たのむこと・力のあるものとしてのみに思うこと（『日国』八、一〇五九頁）。「たのむ」よりどころとする・あてにする・信頼する・信用する・信仰する・特に懇願する・願う（『日国』八、一〇六二頁）。

（よねざわ みえこ 嘱託研究員、浄土宗総合研究所嘱託研究員）